

## 質素に

奥田許子

### 四、ミキ先生とともに生きて

平成五年を四日残して、武田ミキ先生は、九十二歳でお浄土にかえられた。

昭和二十五年の春、希望と不安を胸に入學式に臨んだ。親元から始めて離れて暮らすことに一抹の不安はあったが、家庭的な雰囲気のある学校で、武田ミキ先生と寝食を共にできたことは大変幸せであった。当時先生は、大病をなさっておられたにも拘らず、私共の指導に身を投げうってあたってくださった。ベッドから起きあがられる時には、コルセットを体に嵌めて、そろりそろりと歩かれる。病気に對して無知な私は不思議であり、不安でもあった。なぜ入院なさらないのだろうと思うこともあった。

戦後、日本の乱れた風潮の中で、これではいけない、子女の教育が大切だと、先生は立ち上がられたのである。学校創立間もない学年で、A組、B組と二クラス、先生方も一生懸命御指導くださった。ある冬の朝、鐘がなっ

ているのに大きな火鉢を囲んで数人の生徒が、雑談に花を咲かせていた。「あつ、校長先生」私たちはすぐ自分の席に戻り座ったが、先生は遠くからちゃんと見ておられたのである。数人は先生にお叱りを受けた。「皆さんの御両親は一生懸命働いていらつしやる、そのお陰で学校に来ていることを忘れてはいけない。」「あなた方の仕事は、一生懸命に授業を受けることにある。」と声を強くなさり顔を赤くして説教された。皆一言もなかった。当時は、仕事の出来る者は、年齢を問わず何かして働く時代でもあった。

今にして思えば、武田ミキ先生は先見の明のある人であり、御自分には大変厳しい方で「再利用」「質素」「考えてやりなさい」と常々日常の中で教わった。

当時、和服を仕立てる前に「洗張り」「板張り」「畳の表替え」その他何でも出来ることは指導を受けた。

良き師に縁が深かったことは、私にとって最高の幸せづくりになっている。

武田ミキ先生が、一昨年の十二月病院にいらつしやる時、伺って何か用をさせていただくよう、お願いをしましたが、遠慮なさっていらつしやいました。

学長先生が、ミキ先生のためにお建てになられた家に、退院なさった時の嬉しそうな顔を私は見えています。「こんな立派な家に住んでもつたいない。」とおつしやいました。古い仏壇を安置なさり、日々手を合わせ祖先にお礼をのべておられました。

高校の礼法室の外に梅の木があります。それはそれはみごとな紅梅が咲きます。是非ミキ先生に観賞していただきたいと思ひ、声をかけていましたが、家の側の梅で充分だと言っておられました。

日夜、学長室で早朝より午後九時頃までお仕事を続けていらつしやった。普通の人なら、「まあたまには息を抜

#### 四、ミキ先生とともに生きて

かんと」と思いもするのであるが、それはミキ先生のなさらないことでした。本当に真面目一筋、私はとても真似ることのできない、強い意志を持っていらつしやうた。

昨年の五月六月は、学校帰りに何うと、お苦しい中からとても喜んでくださり、生徒の詠んだ短歌を読んで差し上げた。

なかなか優しいのを、「いいこと、いいこと。」と嬉しそうにおつしやうた。その短歌には生活詠が歌われてあり、父母への思いやり、生徒の素直な心が表現されている短歌が多かつた。

学校から帰りに、塞ぎ込んで立ち寄ると、すぐに見抜かれ、生徒は教育すると思つたら間違いだ、「育てる」と同時に「あなた自身が育っているのだ」と聞かされ、まことに反省をしたことである。

平成六年一月は、学校から帰りに立ち寄る所は、もうない。が常に私の側にいてくださり、「それでいいのですか」「良く考えなさい」「誠という字を忘れるでない。」と叱咤激励してくださるような気がする。お姿が見えない事は、誠に淋しい限りであるが、後輩と共に、学校のますますの発展を祈り、生ある限り、数々の武田ミキ先生の教訓を生かしていきたいと思う。